



秋元雄史がゆく、九谷焼の物語

LIBRARY

代々伝わる“色”を守りながら、 作家としての個性を表現する

第四話

第4話から第6話は「技法の継承と個性」をテーマに、九谷焼を代表する技法と技の引き継がれ方に迫ります。九谷焼を代表する人物として名高い二代・浅蔵五十吉の後を継いだ、三代・浅蔵五十吉さんが窯主を務める「深香陶窯」に伺いました。

「LIBRARY 秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは

長い歴史に育まれてきた九谷焼の「技」は、いかに生まれ、今後どのように変化していくのでしょうか？KUTANism総合監修・秋元雄史が自らその現場に足を運び、ナビゲーターと対話をするなかで、九谷焼を再発見していく連載シリーズ。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

WEB版はこちら





#04

代々伝わる“色”を守りながら、 作家としての個性を表現する

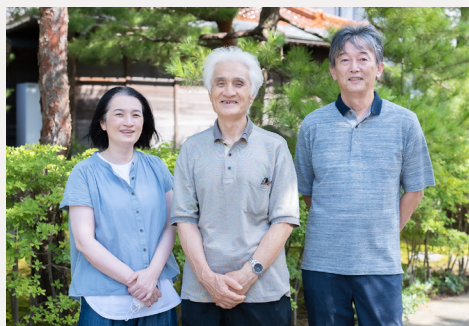
KUTANism全体監修・秋元雄史が自ら現場に足を運び、ナビゲーターと対談をするなかで、九谷焼を再発見していく連載シリーズ「秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」。2021年度は“技法”と“伝承”をキーワードとして、九谷の魅力を、系譜を紐解きながら探っていきます。

第4話から第6話は「技法の継承と個性」をテーマに、九谷焼を代表する技法と技の引き継がれ方に迫ります。今回伺ったのは三代・浅蔵五十吉さんが窯主を務める「深香陶窯(しんこうとうよう)」です。

九谷焼の伝統に現代感覚を取り込み、独自の世界を切り拓いた九谷焼を代表する名工、二代・浅蔵五十吉。その後を継いだ三代・浅蔵五十吉さんは、先代が生んだ「五十吉カラー」と呼ばれる色彩表現をさらに発展させ、造形的な成形と組み合わせて表現の幅を広げた作品を作り出しています。戦後の九谷焼界をけん引した二代の後を継ぐこと、また次世代に技をつないでいくことについて話をお聞きました。

目次

- ✓ 二代・浅蔵五十吉が残した色彩表現を引き継ぎ、それぞれの表現により、可能性を広げる。
- ✓ 分業から一貫生産へ、展覧会への出品が一つのモチベーションに
- ✓ 作家になるためには、まず自分の手で形を作ること。
- ✓ 父から引き継いだ釉薬の調合表、終わりのない“色”の追求
- ✓ この回のまとめ



案内してくれた人

三代 浅蔵五十吉さん(中)、一華(かずか)さん(左)、
宏昭さん(右)

昭和16年(1941年)、石川県小松市生まれ。平成11年(1999年)、故浅蔵五十吉氏より三代を襲名。現在、深香陶窯窯主。日展をはじめ日本現代工芸美術展など、多数の公募展に入選および入賞。深い黄色の釉薬と優れた彩磁彩の技法が特徴。JR北陸新幹線金沢駅のコンコース門型柱にも作品が展示されている。現在、娘の一華さん、一華さんの夫・宏昭さんと三人で窯を営む。

二代・浅蔵五十吉が残した色彩表現を引き継ぎ、
それぞれの表現により可能性を広げる



秋 元： 浅蔵さんの若い頃から、順を追ってお話をお伺いしたいと思います。

浅 蔵： 私は昭和16年生まれなので、若い時というのは、ちょうど戦争が終わった頃ですね。まあ大変な時期でしたよ。家業の方は私で三代目になります。

秋 元： 浅蔵さんのおじいさんに当たる初代が、焼き物の仕事を始めたきっかけは何だったのでしょうか？

浅 蔵： 祖父は兄弟がたくさんいたんです。昔は兄弟が共同で焼き物をしていて、後に一軒一軒独立しました。この辺りには宮本という祖父つながりの親戚が4、5軒あるのですが、祖父だけが浅蔵姓なのは、結婚したときに妻の姓を継いだからなんですね。

秋 元： 当時はどんなものを作っていたのでしょうか。

浅 蔵： 皆さん置物を作っていました。私たちの「深香陶窯」がある小松市八幡という町は、もともと置物の産地だったんです。昔は布袋や獅子、観音さんといったものが多かったですね。当時は彫刻師が原型を作っていて、それを祖父のような職人たちが石膏で型を取り生産していました。その後、自分の作品を作らなくてはいけないということで、祖父は祖父なりのものを作るようになりました。



秋 元： 初代が型物を作っていた頃から二代・浅蔵五十吉になり、随分と方向性が変わったというか、アーティスト志向に変わっていったということでしょうか。個人の作家的な仕事はいつ頃から始まったのですか？



浅 蔵： 父(※)が終戦後に始めました。

初代・浅蔵五十吉の作品。「牡丹獅子」(左)、「龍観音」(右)。

(※)二代・浅蔵五十吉／大正2年(1913年)、石川県生まれ。小学校卒業後、父である初代から陶技一般を習得。昭和3年(1928年)、初代徳田八十吉氏に師事、昭和21年(1946年)に北出塔次郎氏に師事して色絵技術を学ぶ。同年の第1回日展に入選、以来連続入選。昭和59年(1984年)に県内の陶芸家として初の日本芸術院会員に就任。平成4年(1992年)文化功労者、平成6年(1996年)文化勲章受賞。九谷焼界の重鎮として後進の指導にも力を注いだ。

秋元： 戦後からなのですね。戦前はあまり作家的な活動をしていなかったのでしょうか。

浅蔵： 戦前は初代・徳田八十吉(※)のもとで上絵付けと、古九谷風の和絵の具の使い方を学んでいたそうです。

(※)初代・徳田八十吉／明治6年(1873年)生まれ。青年時代、絵付けの仕事に従事していた頃に目にした古九谷や吉田屋の青手作品に強く惹かれ、古九谷や吉田屋の再生に生涯をかけた。素地や釉薬について学びを深め、古九谷五彩を復元。古九谷継承の功績が国に認められ、昭和28年(1953年)、国の無形文化財に選定される。

秋元： 古九谷や再興九谷の話となると、必ず二代の名前が挙がりますね。初代・徳田八十吉さんと共に古九谷の復元調査をされていたとお聞きしています。古九谷の調査をしたり美術を研究したりしていた時期があるかと思いますが、それがどのように個人の制作に影響していったのでしょうか。

浅蔵： 祖父(初代)は窯元として職人仕事をしていたんです。当時はほとんど分業でしたので、完成品を作っていなかった。うちが白い素地を作って、問屋さんに納めて、佐野地区や寺井地区の職人さんが絵付けをしてね。そんななか、祖父は父に対して「職人として素地を作るだけでなく、上絵付けまでできるようになりなさい」と言っていたんです。つまり一貫作業ですよ。そして父は初代・徳田八十吉のもとへ行き、古九谷を勉強してきたんです。



浅蔵： いつも父は「せっかく自分が作った素地なのだから、ちゃんとした洋服を着せましょう」と言っていました。上絵付けがされていないものは売れませんか、自分で上絵付けができるようになりましょうと。20歳で徴兵されて終戦の昭和20年(1945年)に帰郷し、再度、初代・徳田八十吉を訪れたのですが、「ここで7、8年も学んだのだから、もう少しだけ教えても良いけれど、そろそろ独立したらどうですか」言われたそうです。絵の付け方や線の描き方などを色々教えていただいて、最終的には徳田先生が開発した釉薬の調合表も見せていただいた。そ

の調合表というのは、ほとんど暗号なんです。今は我が家に引き継がれています。

秋元： 基本的には徳田先生に学んだ内容をそんなに変えていないのでしょうか。

浅蔵： 調合表には「匁(もんめ)」という昔の単位が使われていますが、私は今でも引き継いだ通りに「キログラム」を使わずに「匁」を採用しています。



工房には素焼きの電気窯のほか、大小のガス窯がある。二代目が電気窯の内側に弁柄(酸化鉄)を塗り、発色が良くなるよう工夫を施した。

分業から一貫生産へ、展覧会への出品が一つのモチベーションに

秋元： 当時のやり方をずっと踏襲しているということでしょうか。それはすごいですね!これまでは分業だったものが一貫作業で行うようになるというのは、どういう思考の変化だったんだろう。九谷焼業界は分業が一般的だと思うのですが、最初から最後まで自分でやろうと思ったというのは、やはり作家志向的な考えがあったのでしょうか。

浅蔵： 当時は展覧会への出品が一つのモチベーションになっていたのだと思います。父が初めて展覧会に出したのは、終戦翌年の日展でした。古九谷を再現したような作品を作って何とか入選しました。その後、「自らの作風を作っていかなければならない」と色も自分で作り、図柄も自分で描かなきゃいけないと、しょっちゅう草花をスケッチしていましたよ。

秋元： 戦後、再開したばかりの日展に出品しているんですね。その頃には展覧会に出そうと考えていたってことか。発表の中心的な場所は日展などが多かったのでしょうか。

浅蔵： そうですね。地元で開催される小規模の展覧会もあったのですが、出品するのであれば、やはり中央で開催されるものということで。父(二代)は北出塔次郎(※)先生からも学んでいるのですが、塔次郎先生は日展に出品した経験がありましたから、日展の雰囲気というのを分かっていたんですね。そこで父に「日展に出品するの

であれば、自分の作品でないとだめですよ」と言ったんです。古九谷や吉田屋を真似したような作品ではなく、形と色と模様、その三つを自分で考えなくてはいけないよと、そういうことを教えてくれたそうです。

(※)北出塔次郎／明治31年(1898年)兵庫県出身。大正11年(1922年)、九谷焼の素地を作る北出家の養子となり色絵を志す。大阪美校に学んだ後、大正7年、帝国美術院展覧会(帝展)に初入選。以降、国展をはじめ文展に出品し特選を受賞、第1回日展でも特選となる。金沢美術工芸専門学校(後の金沢美大)教授、石川県陶芸協会会長を勤め、九谷焼業界の発展に大きな影響を与えた。



二代・浅蔵五十吉の作品「古九谷写色絵軍扇散 山本文人物図録」。

秋元： 現在は職人さんを雇っているのでしょうか。それとも三代と一華さんと宏昭さん、それぞれが個別で作家活動をしている感じですか？

一華： 昔から父を手伝ってくれている職人さんがいますが、基本的にはそれぞれの名前で活動をしています。

秋元： 例えば世の中には窯の名前を付けた作品もありますけど、そういったものは一切ないということですね。どんな流れで個別で活動するようになったのでしょうか。

一華： 自然にですね笑。作品に「深香陶窯」の名前を付けることも、ほとんどありません。特に意識しているわけでもなく、絵柄もそれぞれのものを付けるという感じで。ただ絵の具は代々同じものを使っていて、色の継承的なことはしています。

秋元： 取り決めなどはないのですか？

一華： そうですね、当たり前のようにやっています。



三代目・浅蔵五十吉の長女。金沢美術工芸大学大学院産業デザイン専攻修了。現在「深香陶窯」にて、磁器の成形から焼成、上絵付けまで一貫して制作。先代の伝統である深い黄色の釉の技を継承しつつ、新しく華やかな文様を器に描く。

秋元： 初代から引き継がれてきたメソッドみたいなものを、全く変化させずに継承しているのでしょうか。例えば和絵の具の調合を変えたり色を変化させたりすることはあるのですか？



群馬県出身。金沢美術工芸大学大学院絵画彫刻コース彫刻科卒業。五十吉氏の門下生となり、修業を積む。「深香陶窯」で制作活動中。九谷焼の絵柄を踏襲しつつ、新鮮なデザインを施した作品が好評。花や鳥などの絵柄を、動きを伴うように生き生きと描く。

宏 昭：手を加えることはないですね。もちろん手を加えようと思えばいくらでもいじれるのですが、そうとは言っても少し薄くするくらいかな。

秋 元：宏昭さんは美大で彫刻を学んでいらっしゃるんですね。

宏 昭：はい。浅蔵の作風というか、深香陶窯の特徴はスタンダードな九谷焼なので特に変わったことをしているつもりはありませんが、形を作るという意味では、彫刻の経験も役に立っているのかも知れません。なかなか自分の仕事を言葉で説明するのは難しいです笑。



宏昭さんの作品には、龍や獅子がモチーフのものが多い。

秋 元：技法的なところに手を掛けるよりも、構図や絵に力を入れるということでしょうか。

一 華：私たちは一貫で作業をしているので、素地から作って上絵付けまで行うとなると、当然どこにウエイト置くかということを考えますね。全部に手をかけて全体的に浅くなってしまっては良くないので。

秋 元：土はどこのものを使っているのでしょうか？成形はろくろで引くことが多いですか？

宏 昭：昔から花坂陶石で、粘土は谷口製土所にお任せしています。ほとんどもろろで作っていますね。



作家になるためには、まず自分の手で形を作ること。

浅 蔵： やはり原点は、自分の手で形を作ることだと考えています。ろくろを最初に学んで、茶碗にしても花生けにしても、自分で作る。「作家になるために、まず職人になれ」。これは第一条件だと思うんです。何も形を作れないのに作家を名乗る人は、どこにもおりませんから。九谷焼は粘土から無限の形を作るので、どうしても技術がないとできませんからね。父は「真理は技術」とよく言っていました。道具を使って形を作るにしても、その道具も自分で作らなければいけないよと。

秋 元： 作品を作る上で一番重点を置いているのはどんなところですか？

浅 蔵： 私の場合は、形はもちろんですが、最終的には図案と色が大切だと思いますね。形はある程度オーソドックスなものが多いです。

秋 元： 図案や色を一番生かせるのは大皿のような形でしょうか。



中央が三代・浅蔵五十吉さんの作品。

浅 蔵： そうですね。それと、刻彫（こくちょう）と言って、形を作った上に粘土で肉付けしたり竹べらなどを使って線を引いたりして、形自体に模様を付ける場合もあります。九谷の場合は綺麗で歪みのない皿に絵を付けることが多いですが、私の父はどちらかというと、刻彫した上に絵付けをすることが多かったですね。

秋 元： 絵を描くための土台として形もしっかり作らないといけない、という感じでしょうか。

浅 蔵： そうですね。場合によっては先に図案を書いてしまって、その図案に合った形を作ることもあります。

秋 元： 上絵付けについてお聞きたいと思います。色々な描き方があるかと思いますが、いくつか窓絵（※）を組み合わせる全体を構成する人もいれば、一枚の絵として考えていく場合もあるでしょうし、皿の場合は上下左右がありますよね。焼き物における絵は、どのように考えれば良いのでしょうか。

（※）窓絵／枠を設けてそのなかに絵を描くこと。

浅蔵：はじめに紙に下書きをしますが、立体ですので上絵付けの際に筆で直すことはありますね。やはり描きやすいのはお皿です。

秋元：平らな面はできるだけ多くあった方がいいということでしょうか。やはり絵として描いているということですね。私は絵画出身なので、絵という前後左右や奥行きを想像するのですが、立体的な焼き物に絵を描く場合は通常の絵画とは違ったこだわりがあるのではと思います。



三代・浅蔵五十吉さんの作品には椿をモチーフとしたものが多い。

浅蔵：そうですね。例えば立体的な焼き物に鳥を描く場合、まず初めに鳥を描く場所を決めて、続けて必要があれば鳥に関連したものを周りに描いていきます。花生の場合でしたら正面に持てきたい絵柄を決めて、そこから後ろに向かって展開図のように描いていくんです。

父から引き継いだ釉薬の調合表、終わりのない“色”の追求

秋元：浅蔵さんの作品は色が一つの特徴ですね。

浅蔵：私は五彩の色をミックスして、少し変わった色を作りました。「浅蔵五十吉の色」とよく言われる結晶を含んだような黄色っぽい色は、父の代からずっとある色なんです。ただ私の代と父の代では、やはり結晶の出方や癖が若干違いますね。同じ調合表を使っても、調合の仕方によって絶対に同じ色というのは出ません。父から色をもらったときも、しばらくは失敗ばかりしていました。

一華：しまいには水が悪いんじゃないかって笑。

浅蔵：ただ、失敗を繰り返しているうちに面白い色がポンと出てくるんですね。それを私の色として使うと。私はかつて

名古屋にあった「国立名古屋工業技術試験場陶磁課（現・産業技術総合研究所中部センター）」で色の勉強をしたのですが、そこで「九谷焼は色が大事なんですよ。色はね、黄色を作るにしても紫色を作るにしても、“これで完成”というものは無いんですよ」と言われたことが印象に残っています。なぜかと問うと「一番大切なのは原料です。原料は必ず変わりますよ」と仰ったんですね。「原料の調合によって、ものすごく幅が広がります。だから色の勉強をすると非常に面白い。描くことも大事ですが、合間を見ながら色んな調合を試してみなさい。冒険のなかに新しいものが出てきますよ」と。それが今でも心の中に残っています。



秋 元： 浅蔵さんが焼き物の世界に入ろうと思ったきっかけは何だったのでしょうか。

浅 蔵： 家業でしたので、そこは迷わなかったですね。

秋 元： お父さんに弟子入りする形だったのですか？

浅 蔵： 私は石川県立工業高校を卒業した後、元々は美大に行く予定にしていたんです。そうしたら、父と付き合いがあった北出塔次郎先生に「大学に入るよりも実際の現場で学んできてはどうか」と言われて、それで国立名古屋工業技術試験場に入所しました。そこでは粘土の作り方から釉薬の作り方、ろくろの引き方、窯の炊き方まで全てを教わりました。彫刻の先生と出会って、彫刻についても習いましたね。二年間の研修から帰ってきて北出塔次郎先生に弟子入りし、二年間学びました。



設備が整った工房。以前は多くの職人が働いていた。型倉庫には初代が使用していた型も残る。上絵付けはそれぞれ別の場所で行う。

秋 元： 実家に戻ってきてから、お父さんとの関係はどのような感じだったのでしょうか。

浅 蔵： 父は、人にものを教えるということはありませんでした。ただ「作家になきなさい」とは言われました。「自分の作品を作る以上は、他人に作品を見てもらって、評価を得て初めて作家になるのだ」と。それから日展への出品を始めました。人から作品を見てもらって意見を聞くのは、やはり大切なことだと思いますね。



三代・浅蔵五十吉さんの日展初入選作品「岩層」。

秋 元： 今はどのくらいのペースで展覧会に出品しているのですか？

浅 蔵： 最近は日本現代工芸美術展と日展だけです。時々グループ展にも出品します。以前は東京でもよく個展をさせていただきました。

秋 元： 展覧会の在り方というのは、昔と比べて変わったように感じていらっしゃいますか？

浅 蔵： 時代と共に変わってきたと思います。過去に日展で賞を取ったとか、作家の名前で売れる時代ではもう無くなってきていますね。

浅 蔵： しかし、焼き物の世界ほど奥深いものはないですね。九谷だけでも相当幅広いですから。だからこそ、何をどうしたら良いかと迷う若手もいるんじゃないかと思います。一生のうちに、自分の作風として何を残していくか。そんななかで、人を育てるという宿命的なものが、何か私たちに課せられているんじゃないかと思います。



「深香陶窯」のギャラリーには様々な作品が展示されている。

秋 元： 一華さんと宏昭さんは現在、どのような活動をしているのですか？

宏 昭： 首都圏のデパートで発表するなど、個展やグループ展を中心に活動しています。陶芸を始めたばかりの頃には公募団体展にも出品していましたが、最近は出していないですね。

秋 元： 時代も変わってきていますからね。それぞれご自身の仕事については、どのように考えていらっしゃるのでしょうか。

一 華： 私としては全然難しく考えていなくて、とにかく目の前にある仕事に集中するようにしています。予定しているグループ展や個展に合わせて少しずつ制作を進めたり細かい作品を作ったりして日々が回っている感じで、あまり難しく考えるとかえって制作ができない気がするので、気負いすぎず細々と続けていきたいと思っています。

秋 元： 近年では作家さんが外部とコラボレーションすることも増えてきていますが、そういった取り組みは何かされていますか？

宏 昭： 僕たちが参加している、小松市や九谷焼作家などでつくる「こまつKUTANI未来のカタチ」というプロジェクトがあるのですが、その取り組みの一貫として、地元企業の小松マテーレ、多摩美術大学の学生とコラボレーションした作品を作り、2021年3月に東京・ミッドタウンのギャラリーで展示をしました。一華さんが図柄を考案・上絵付けをし、私が傘立ての制作を担当しています。



コラボ作品「九谷傘 氷雨」。手描きの柔らかさや上絵の具の表情、小紋の細かさが表れるよう試行錯誤して手掛けた。

秋 元： 面白いですね。去年からずっと取材をしてきて、九谷には色々な可能性があると思うのですが、やはり新しく必要とされる場所をどう作っていくのかという課題があるように感じています。それは作り手だけが提案するのではなく、誰かと手を組んで新しいものを作るという方法もありますし、様々な展開をしていく時期にきているような気がします。一華さんがこの道に進んだのはどういった経緯だったのでしょうか。

一 華： 若い頃は、いわゆる反抗心なのかも知れないけど、「うちを継がなきゃ」ってことは考えていなかったんです笑。高校生になって進学先をどうしようかと考えたときに、父は何も言わなかったのですが母が美大を勧めてきて。

祖父たちが夜遅くまで仕事をしている姿も見てきたので、少しでも家業を手伝えればと思い金沢美大に進みました。

秋元： 作家活動をするなかでのこだわりは何ですか？

一華： 九谷らしい絵付けも大事だけど、そのなかでも自分なりの文様だったり模様だったりを作っていきたいと思っています。



一華さんの作品は、伝統的な小紋を様々な形にアレンジして絵付けをしており、細かい文様と大胆な模様の組み合わせが特徴。

秋元： 釉薬の調合というのはご自身で行っているのですか？代々続く「浅蔵五十吉」を継ぐことに対してはどのように考えているのでしょうか。

一華： まだ絵の具の調合は父から教わっていません。先ほど暗号で書かれた調合表と言っていましたが、見たこともないしどんなものなんだろう笑。受け継ぐのはギリギリになると思います。父は私の仕事に口を出してこないし、私も教えてほしいと言わないし、親子ってそんなものなんじゃないでしょうか。「浅蔵五十吉」をどうしても自分が継がなきゃいけないとは考えていないです。ただ五十吉を名乗る名乗らないは別として、とりあえず九谷焼を作るということは、私たちの代は一生懸命続けていきたいと思っています。

この回のまとめ

三代・浅蔵五十吉さんのお話から、再興された九谷焼が二代の手を通して三代に受け継がれ、この過程で九谷焼は他の焼物と同様の職人技術から、芸術への道を進んできたことが理解できる。昭和の工芸は、一口に言えば工芸の芸術化への道であったが、九谷焼もまさにそのような道をたどり、今日の作家工芸となっていく。その主要な発表場所として日展や日本現代工芸展があった。そこで活躍されてきた三代は、工芸の近代化、芸術化のプロセスを体現した方と言える。また、その後を継ぐ一華さん、宏昭さんは昨今の工芸界の事情を反映して活動場所を広げ、他分野とのコラボレーションなども行ない、それぞれの表現により九谷焼の可能性をさらに広げている。

個性を生み出す技法

Techniques for creating individuality



九谷焼の芸術祭 KUTANiism

主催：クタニズム実行委員会 共催：小松市、能美市 協力：石川県九谷窯元工業協同組合、石川県陶磁器商工業協同組合、九谷上絵協同組合、九谷団地協同組合、公立小松大学、こまつKUTANI未来のカタチ、小松九谷工業協同組合 後援：北國新聞社、認定NPO法人趣都金澤

クタニズム実行委員会事務局

〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地(小松市役所観光文化課内) Tel: 0761-24-8130 Mail: info@kutanism.com



クタニズム



<https://kutanism.com>